

いきなり異世界召喚

く巫女として呼ばれた私は強引な狐に溺愛求婚されるく

ショートストーリー



「コハク……？」

そう呼ぶ巫女の声が屋敷に響き渡ったのは、とある
昼下がり。

「はあ、どうして返事がないんだろう」

思わずため息が漏れる。巫女の目線の先には可愛ら
しく盛り付けられた2つのケーキ。

こうしてさつきから、何度か声をかけているのに返
事がない。

（せっかくコハクが食べたいって言ってたから作
ったのにつ……）

いつもは呼ばなくとも、気がつけば側にいるのに

今日は一向に姿が見えない。

「コハク……？」

あらためてもう一度名前を読んでみるが、反応がな
い。せっかくお茶も入れたのにこのままでは冷めて
しまう。

コハクがいそうな場所をあれこれと考えながら、形
が崩れないように気をつけながらお皿をお盆に載
せる。窓から庭先を見ても誰かいる様子はない。

（……そうしたらあそこかな？）

最近、時間ができるとコハクがこもっている場所に
目星をつけ、巫女は部屋をあとにした。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

（コハクの好きな桃を使ったケーキ……初めて作
ったけど喜んでくれたらいいな）

そもそもなぜ巫女がコハクにケーキを作ることになったのかというと、それは先日の二人の喧嘩に遡る。

「もう、そのように薄着で出歩いて風邪でも引いたらどうするのですか？」

「ああ、食器は私が運びますから、座って待っててください」

「高いところのものを取るときは私のことを呼んでくださいと言ったでしょう？」

元々過保護気味であったものの、お腹の中に子供がいることがわかってからは以前にも増して過保護に拍車がかかっていた。

はじめは「わかったよ」と聞いていたが、ある日「もうっ……そんなに心配しなくても大丈夫だった

てば！」とつい声を荒げてしまった。

「あっ……」と、すぐに悪いことをしてしまったと思うも、一度出してしまった言葉は戻らない。

結局、その後コハクに謝らせてしまい、なんとなく片付くという嫌な終わり方になってしまったのだ。

今日はその時のことを謝りたくて、そのきっかけとして二人で以前話していたときにコハクが食べたがっていたケーキを作ろうと思い立ったのだった。

「ちゃんと美味しいって言ってくれたらいいな」廊下を歩きながらそうつぶやく。

少し前に、巫女が生まれた世界の話をしていき、「好きな菓子はありますか？」とコハクに聞かれ、答えたのがケーキだった。

話しているうちに「なるほど、そんなものが……」
と興味深そうにしていた。

だからこそぜひコハクに食べてもらいたかった。

ただ、こちらに来てからケーキを作るのは初めてで、
ちゃんとした材料や道具もこの世界にない。

そのため、おぼろげな記憶を頼りに何とか似たよう
なものを寄せ集めた。

(味見もしたから……たぶん大丈夫なはず)

なんとか見様見真似で作ってみたものの案外悪く
ない出来になったと思う。

「早く食べてもらいたいなあ」

そう呟く巫女の足は自然と早くなるのであった。

◇ ◇ ◇ ◇

「あ、やっぱりここにいた」

屋敷の一番奥、様々な書物が置いてある部屋に向か
うとその真ん中に難しい顔をして一冊の本にとら
めっこをしているコハクの姿があった。

「おや、どうされたのですか？ そんなにつ……」

コハクは巫女の姿を見てなにか言いかけるも、すぐ
に口を閉じる。

「ねえ、また何か心配しそうになったんでしょ？」

「い、いえ……そんなことは……」

どうやらコハク自身も巫女に対して過保護すぎる
と反省しているらしい。

(もうっ……本当に真面目だなあ)

そう思いつつ、巫女は口をひらく。

「あのさ……この間は怒っちゃってごめんね？
もしかしたら……コレ、一緒に食べよう？」

お盆の中身を見せながらそう言うと、コハクは一瞬驚いた顔をしたあと、すぐにふふっと笑い出した。

「もうなんで笑うの……!」

「いえ、だってっ、ふふっ」

そう言いながら見せてきた一冊の本。そこには『簡単なケーキの作り方』と書いてあった。

「どうやら同じことを考えていたようですね」

「えっ……なんで!?!」

「ですから、私も謝りたくて……」

コハクは少し恥ずかしそうに話し始めた。

自分も同じように仲直りがしたくて、以前話に出たケーキを作ろうと思ったらしい。

「それじゃあ同じことを考えていたってこと?」

「そういうことになりますね」

「っていうかその本はどこから取り寄せたの?」

「巫女様のように人を召喚するのはとても大きな力が必要で、そう簡単にはできません。ですが、物を取り寄せる程度であればそこまで大きな力はいらないのです。もちろん何度でもとはいきませんが」
ほらっ、というコハクの周りを見ると、元の世界で見たことのあるような本などがいくつか積まれていた。

「まあ……向こうにいる同じ一族の者もいますからね」

そう言われると、たしかにコハクは巫女のいた世界について多少の知識があったことを思い出す。

「ああ、巫女様の作ってくださいだった、けえきはとても可愛らしい見た目で、食べるのがもったいないで

す」

お盆の中身を見つめながらコハクがそうつぶやいたあと、コホンと咳払いをしてから少し心配そうにつづけた。

「ですが……体調は大丈夫でしょうか？ お腹も随分と大きくなってきましたし。無理はなさっていませんか？」

「大丈夫だって、あ、今蹴った。ふふっ、これって私達が仲直りしたことが嬉しいのかもね」

「もう、そんなわけないでしょうっ、本当に大丈夫ですか？」

「だから心配すぎだよ。大丈夫だってば！ ほらコハクも触ってみて？」

コハクの腕を掴んでお腹に当てると、それに返事を

するかのよう^に、また赤ちゃんはお腹を蹴った。

「ああ……本当にここにいるんですね」

「そうだよ。ふふっ。あ、そろそろケーキ食べよ？」

こっちでは初めてつくったけど味は大丈夫なはずだから。はい、あーん」

そういつてコハクの口に運ぶ。

「んっ、もぐもぐ、これは……とても美味しいです」

嬉しそうに微笑みながらコハクは頬張った。

「次は貴女の好きな果物で作りましょうね」

「うん、そのときは一緒にね」



こうして巫女とコハクのちょっとした喧嘩は終わり二人は仲直りしたのであった。

おわり